

「脳力のレッスン」

2021年07月21日

岩波書店の月刊誌『世界』に長く連載している寺島実郎氏の「脳力のレッスン 本質を見抜く眼識で新たな時代を切拓く」を愛読している。短い寄稿文であるが、寺島氏の幅広い関心事が鋭い視点で書かれている。最近、仏教、神道、キリスト教などの宗教について多くを書き、その洞察の深さに敬服している。寺島氏は、経済が専門で、経済に絡んだ社会科学の世界を歩んだ人である。8月号の「戦後日本人としての宗教再考— 問われる新たなレジリエンス」で、宗教問題に関心を寄せた理由が分かった。

世界を歩み、多くの人と出会い、強く印象付けられることは、世界は宗教に溢れ、宗教が歴史を動かし、時代を揺さぶっている事実である。それに対し、戦後の日本の宗教性は極めて希薄で、世界史視点から見れば、特異な国であることに気付かされた。寺島氏は、特定の宗教に帰依する者ではなく、宗教学者でもないが、宗教の意味を問い詰めなければ、世界を捉えられないとの思いで、宗教論を展開している。

戦後、宗教性が希薄になったのは、三つの要因が重層的に相関していると言う。一つには、天皇を神とする天皇親政国家を形成し、近代化を図り、富国強兵を目指した。昭和に入り、「神国日本」という共同幻想が再燃し、「起て一系の大神を、光と永久に戴きて、臣民我ら皆共に、御稜威に副わん大使命、往け八紘を宇となし、四海の人を導きて、正しき平和打ち建てむ」という歌にかき立てられ、新世界秩序を目標にし、アジア侵略戦争に邁進した。しかし、敗戦により、大鳥居（国家神道）と「菊」（天皇）と「刀」（軍部の専制）から解放され、全体（公）が押し付ける価値に疑い深くなった。天皇宗教との決別である。

宗教性を希薄にした二つ目の要因は、戦後の貧しさからの脱却を求めた「食べること」つまり、経済回復であった。経済的繁栄という価値観が都市新中間層の共感を呼び、私生活の豊かさと利便性で満足することが「宗教」になっていった。松下電器の「明るいナショナル」のCMソングと共に松下幸之助が「経済の神様」になった。私生活を謳歌する戦後の日本は、自分の幸運だけを祈る「グッドラック宗教」となっていた。ところが現在、この都市新中間層も第三世代となり、盆暮れに帰る故郷もなく、田舎では人口減少によって「寺じまい」も進行している。

第三の要因は「社会主義の幻想」がもたらした影響である。階級矛盾を克服した社会主義に共鳴し、「宗教よりも労働者の団結」に心を寄せていた。資本主義の先に社会主義社会を夢見る革命幻想は、ソ連東欧の内部崩壊によって、社会主義に共鳴していた人たちの価値基準は揺らいだ。イデオロギーを奉じた日本人は宗教に回帰することのないまま、指針を持たないグローバル化の潮流に飲み込まれていった。

そして、コロナのパンデミックに襲われた。生命の危機に直面した時、人間の心は不安と恐怖に揺らぐ。それに冷静に制御する耐久力・回復力がレジリエンスなのだが、その脆弱性が浮き彫りになった。10代から30代までの若者の自殺者が急増している。自殺には様々な事情があるが、心の耐久力の低下を直視せざるを得ない。臨床医として働く、ある老医師が、「宗教心の無い人が末期医療の段階を迎えるとパニックになる人が少なくない。宗教心が無いということは死生観が無いということで、自分を制御する魂の基軸が無い。医療現場に臨床宗教師が必要な時代になった」と語っている。

宗教は「RELIGION」の訳語で、その原義は「再解釈と再結合」だという。宗教の定義は極めて多様であるが、宗教社会学の古典の E・デュルケムの『宗教生活の原初形態』では、

「宗教とは神聖すなわち分離され禁じられた事物と関連する信念と行事との連帯的な体系であり、教会と呼ばれる同じ道徳的共同社会に、これに帰依するすべての者を結合させる信念と行事である」と定義している。私の言葉と理解で言えば、次のようになる。英語の「RELIGION」はラテン語の「RELIGIO」で「つなぐ・結ぶ」という意味である。人は超越する神聖な方と信仰において結び合う、そこに、自分のアイデンティティを確保する、そして、この信仰を同じくする者が教会という共同体を形成する。宗教は神と人を結び合わせる機能を果たし、共生の喜びを共有するのである。

寺島氏は「宗教とは再解釈と再統合を原義とする」という理解に納得すると言う。使徒パウロは、キリストの十字架の死を「人間の原罪を背負った死」に昇華させて、民族、階級、性別を超えた「キリスト教の世界化」をもたらした。解脱を得た仏陀の内なる仏教を弟子たちが「衆生救済」の大乗仏教へと高めていった。人類は、絶えざる「再解釈と再結合」の思惟によって、世界宗教を形成していた。その事情を読みとることができる。

寺島氏は、無宗教者であるが、無宗教者の「宗教性」を大事にしたい、特定の神仏への信心はなくとも、神や仏の気配を感じ、大きな意思が自分を見つめているという意識は、人間が生きる上で重要であると言う。彼が出会った世界の優れた宗教者に共通する空気は、他者の苦痛に共感する静かな「利他愛」であった。他者の苦悩に共感し、他者の喜びを愛する共生を全うすることが、人類の普遍的宗教意識に通じる。宗教学者・島藺進が『日本仏教の社会倫理』で、仏教の本質を「一切の生きとし、生きるものは、幸せであれ」と言い著した言葉に集約できよう。

そして、以下が寺島氏の日本人の宗教観である。日本人の魂は、中東の一神教の信者のような「絶対神」を受け入れることは難しい。宗教性は希薄ではあるが、潜在意識において、穏やかな「神仏儒」を習合させた価値を抱えている。故郷の自然と同化した氏神様への崇敬とも言うべき神道信仰がある。日本独自の創造的仏教を拓いた空海、親鸞、日蓮などの仏教的思潮がある。また、論語などから読み込んだ儒教的規範もある。これらが相関して重層的に心に堆積し、日本人の精神の深層底流を形成している。コロナ禍の中で、耐久力（レジリエンス）を取り戻すために、神仏の大きな意思が見つめている気配を感じ、宗教に心を動かす人が増え、宗教の真価が問われる時代である。寺島氏の論考はいつもクリアであるが、日本人の宗教観に関しては曖昧さが残る。私は、日本人が神道、仏教、儒教に立ち戻っていくとは思えない。キリスト教が浸透していくとも思えない。宗教心によって、生きる耐久力が高められることは確かであるが、それを、どのような形で醸成していくかは分からない。行き詰まった悲劇が新しい可能性を生み出すのではないか。

寺島氏は、令和の日本人に別の課題に直面していると言う。10年前の東日本大震災、そして、現在のパンデミックを経験した社会不安の中から、国への統合願望が強まり、「連帯」「絆」「結束」に心が惹かれ始めている。中国の台頭という外部環境が変化し、「中国の脅威」を打ち消すかのような、「唐ころから大和ころへ」というナショナリズムが高まってきている。こうした時代の空気を背景に、宗教性の希薄な日本人に向け、国家神道を掲げた戦前への回帰を志向する勢力が、天皇親政を再興しようと、「天皇を元首とする」憲法改正のアジェンダを埋め込もうとしている。寺島氏は、「私は日本人のしなやかな宗教性が試されると思っている。戦後民主主義を護ることと宗教を政治化させないことは相関しているのである」と締めくくり、警告している。